史跡踏査委員会

夏季県外史跡踏査報告

「修験道の山と河川・海運交通の要衝酒田を訪ねる—米沢、羽黒山、酒田、鶴岡方面—」

横浜市立みなと総合高校　加藤　敬

はじめに

今年度、県外踏査は八月一八日から一泊行程で山形の米沢、羽黒山そして酒田、鶴岡方面であった。ここ数年、かなりの長距離の踏査が続くが、今年も一二五〇kmをこえる踏査となった。テーマは「修験道の山と河川・海運交通の要所・酒田を訪ねる」。おもな行程は次の通りである。

第一日目（八月一八日）

横浜駅（七・三〇）→米沢（松岬神社、上杉神社、宝物館・稽照殿、市立上杉博物館、ここで各自昼食）→羽黒町（いでは記念館、出羽三山神社、五重塔）→宿泊地（ホテル海山）

第二日目（八月一九日）

宿泊地（七・四五）→城輪柵（出羽国府跡）→酒田（酒田市立資料館、日和山公園、山居倉庫、〔本間家旧本邸、旧鐙屋〕各自昼食）→鶴岡（旧致道館、〔鶴ヶ岡城址、致道博物館〕）→横浜駅

※〔　〕は各自自由散策

一、米沢へ

早朝、横浜駅西口から、米沢へむかう。東北道は盛夏の時期、一面の緑波・稲穂が続き、自然の豊かさを実感。第一目的地が米沢である。ということは横浜からの距離を考えると、到着時間が懸念された。が、予定通り昼過ぎに到着。

ここ米沢は山形県南東部に位置し、市域東部を奥羽山脈が通っている。南部から西部へかけては吾妻連山に属する山岳地帯となっている。地形的には奥羽山脈・吾妻朝日連峰により太平洋・日本海と隔てられており、夏は高温多湿、冬は西の荒川峡谷沿いに吹き込む北西季節風が多量の積雪をもたらす。県内でも尾花沢に次ぐ豪雪地帯という。街路を見ると城下町特有の街割が感じられ、道路中央には融雪施設が見られた。特有の道幅が冬季にはもっと狭く感じられるかもしれない。そういえば三月下旬の下見時はちょうど北西の強い季節風が吹きつけ、希にみる猛吹雪の中での下見であった。

米沢の開発は文治五年（一一八九）、大江時弘が鎌倉幕府から長井庄の地頭に任命されたのに始まるという。米沢城も暦仁二年（一二三九）ごろ築城される。伊達氏、蒲生氏の領有時代を経て慶長年間に会津一二〇万石の上杉景勝の領有するところとなり、上杉の武将・直江兼続が米沢三〇万石を統治した。関が原の後、西軍側の上杉は米沢三〇万石に減封となり、会津若松城から米沢城に移る。当時、戸数八〇〇あまりの米沢に六〇〇〇を超える家臣団を収容しなければならなかった。そのため街割を整備しながら、下級武士の大部分を城外の花沢・南原などの原野に屯田兵式に移住させ、半農半武士的な生活を営ませたという。このような半農半士の村を原方とよんだ。どう考えてもかなりの労苦が想像される。その上、寛文四（一六六四）年には世継問題（三代藩主に後継ぎがなく、吉良義央の息子を養子に迎える。余談であるが地元の人の話では米沢では忠

臣蔵の話はしにくいという）で石高を十五万石に半減させられた。この窮乏の中、藩財政の立て直しを図ったのが一〇代藩主の上杉鷹山である。現在まで続く米沢織の基礎も作った。一時期、バブル崩壊時の不況下、鷹山の藩政改革にならおうというブームが起こったことを思い出す。米沢城跡にある松岬神社にはこの上杉鷹山が祭られており（写真①②）、上杉鷹山の銅像前で観光客が写真撮影に興じていた。松岬公園入口には上杉縁の「毘」の旗が我々を迎えてくれた（写真③）。ここを通り、上杉神社（祭神・上杉謙信）と上杉氏宝物館・稽照殿へ。稽照殿は上杉謙信から景勝、直江兼続・上杉鷹山関係の遺品や遺墨等、重文を含め約三〇〇点が展示されており、特に服飾類は桃山期の逸品ぞろいであった。謙信ゆかりの胴服類、刀剣、鎧、また紺地日の丸も目を引く。鷹山関係では師細井平洲との交流を記録した書状もみられた。国重文の平安期・絹本著色毘沙門天像一幀も。

隣接する市立上杉博物館は自由見学である。上杉氏の歴史と置賜地方の歴史を概観した。常設展示館は上杉を中心とした「江戸時代の置賜・米沢」を主軸に構成されていた。特に「洛中洛外図の世界」では国宝「上杉本洛中洛外図屏風」の絢爛さに目を見張った。ただし複製であるが。同時に国宝「上杉家文書」も展示されていた。よく読むとその中の記述に江戸幕府の圧力が読み取れた。例年この踏査では、様々な博物館に足を運ぶが、ここは先年の踏査で行った福井市立博物館と共通するところが感じられる。体験型で立体的な把握を可能とする。若い人には特に良い契機を与えてくれるかもしれない。

ここで山形大学教授の岩鼻通明氏と合流し、羽黒山「いでは文化記念館」まで説明を受けながら移動する。

二、羽黒山と修験道・宿坊集落

岩鼻氏は京都大学文学部史学科出身で現在山形大学農学部教授、日本における宿坊集落研究の第一人者である。バス内ではメインテーマの宿坊集落と修験道のかかわりだけではなくこの地の歴史、風土、産業に至るまで多岐にわたり主に地理学的見地から詳細に説明を受けた。たとえば、米沢は山形有数のＩＣ内陸工場地帯であること、またその発達要因、高畠町一帯に広がっていた斜面利用のビニールハウス果樹栽培の発展（ここではデラウエアだけではなくナイアガラという新品種のブドウ栽培が盛んなこと）、東根市における内陸工業の発達要因（山形空港開港により米沢だけでなく天童や東根も内陸工業地帯として発展を見せていること）等、多様で詳細な分析説明であった。大綱地区を抜けるあたりでは車窓から棚田の風景が目に入った。第三紀層で形成された地すべり地帯であることの説明で一昨年の北越地すべり地帯を思い出した。同じ車窓の光景に一同納得。（地すべりは豪雪の年の五～六月に多く発生し、道路・橋のメンテナンスに多額の費用がかかるという）。果樹栽培については、例えば庄内柿の説明や名産のラフランスも上山等内陸部が中心で酒田方面は「日本なし」が多い理由に及ぶまで説明があった（冬の季節風の違いによる）。地理学的見地からの説明は大いに関心を高めた。

豪雨の中、バスは手向（とうげ）の宿坊集落へ入る。集落に入り、すぐに目に付いたのが各宿坊の軒先につるされた巨大な注連縄様のもの。これを「引き綱」という。異彩を放ち、初めて見るものに興味を持たせる（写真⑤⑥）。集落には石垣が築かれ、屋敷林で囲ま

れた茅葺の立派な門構えの宿坊が建ち並んでいる。高野山や善光寺の宿坊とはまた違う様相である。岩鼻氏の研究対象地である手向は出羽三山の八方七口中、最大の山岳宗教集落という（日本においても最大級の山岳宗教集落）。江戸期には三〇〇余坊の妻帯修験が居住していたというが、明治初期の神仏分離令で全て下山した。現在は三三軒ほどの宿坊がある。この中には出羽三山神社から離れて単立の宗教法人を形成している宿坊も二、三存在するという。この中で正善院は今も仏法護持を貫き、三山神社とは別個に入峯儀礼を毎夏実施しているという。集落内には頼朝寄進といわれる重文・黄金堂がある（写真④）。羽黒山麓の「いでは文化記念館」で修験道の説明、解説を聞く（写真⑦）。映像シアターや実物展示などにより出羽三山信仰や修験道を具体的に知るための工夫を感じた。特に「秋の峰入り」大晦日の「松例祭」は映像がなければなかなか理解しづらいかもしれない。また展示してある「引き綱」の実物から「松例祭」との関連に関心が移った。手向集落に入りまず目に付いたのは「引き綱」である。これについて簡単に説明したい。

松例祭と「引き綱」

松例祭とは大晦日の伝統儀礼で新年の豊作と豊漁を願う習俗である。雪深い大晦日の夜、手向集落を上町、下町に分けて巨大な綱を引き合う。真中には藁で作られた三角形の巨大なツツガムシ。三山神社によって選ばれた奉行の判断により、上町が勝てば豊作、下町が勝てば豊漁という。早速気になることを質問した。「庄内米で有名なところ、集落の人々は上町勝利を願うのでは?」など。笑われてしまったかもしれない。結局どちらが勝ってもおめでたいということのようだ。そして、残った綱を畳んで、真中に龍神をかたどった黒い麻糸を結び、縁の人家の軒先に厄除けとして飾るという（写真⑤⑥）。手向集落に入って最初に驚いた「引き綱」の由来がここでやっとわかった。

出羽三山神社・三神合祭殿から随神門へ下る

バスで羽黒山頂へ向かう。ここは出羽三山信仰羽黒派修験道の中核をなす霊場で、月山、湯殿山は冬季豪雪のため登拝が不可能なことから羽黒山の出羽神社に合祀し、ここに三神合祭殿が創建されたという。三山とは月山、湯殿山、羽黒山の総称で出羽三山を歩くと単に三つの山々の地上空間を通過するだけではなく、現在・過去・未来という生命時間を旅することを意味するという。羽黒山は現世の衆生を願う観音菩薩、月山は過去、つまり死後の世界の阿弥陀如来、そして湯殿山には未来を象徴する大日如来をそれぞれ祀って信者・行者を迎えるという。また、女人禁制だった月山、湯殿山と違い羽黒山は女性の登拝も認められていた。三神合祭殿は重文・入母屋造りの日本最大の茅葺建物である。三月下旬の下見時には吹雪で深い雪に埋もれていた三神合祭殿（写真⑧）であったが、この日は雨あがり直後の冷気の中、巨大な屋根がせまってきた（写真⑨⑩）。その正面には鏡池があった。この鏡池も雪に埋もれていた三月と違い、広さや位置も確認することが出来た（写真⑪）。ここでは藤原期中心の六〇〇面余の古鏡が出土している。「池中納鏡」といわれ全国にも同様な遺構が確認されている。これも農耕儀礼（農耕にとって重要な水霊信仰からきた信仰の習俗）の一つという。また、蒙古襲来時の暴風発生時にこの池から龍神が踊り出たという伝説が今も残る。その先、霊祭殿裏へ行き、息を呑んだ。多数の首のない着衣の石仏（岩鼻氏によると神仏分離で山中に捨てられた石仏を供養し

たという）、水子供養の膨大な卒塔婆と風車が迫った（写真⑫⑬）。夜、ここを歩くにはかなりの勇気が必要かもしれない。神仏分離といえども祖先供養がここにも残り、山岳信仰の伝統的世界が表れていた。ここから全長一七〇〇m、二五〇〇段の階段を下る。石段の踏み幅が狭い（写真⑭⑮）。両側には樹齢三五〇～五〇〇年の杉巨木が続いていた。途中、現在も羽黒山参籠所として使われている斎館を通り（写真⑯）、県指定史跡・南谷別院跡の芭蕉碑も確認。芭蕉も元禄二年（一六八九）六月、ここを訪れている。芭蕉と同じ道をたどっていることを知る。本坊跡を下り、途中二の坂茶屋で一休み。ここからは視界が一気に開け、豊かな庄内平野が俯瞰できた。急坂で疲れた身にはこの景色は一服の清涼剤となった。気分爽快！しばらく下ると随神門近くには白木造の羽黒山五重塔があった。この五重塔は三山神社の鐘楼とともに明治元年（一八六八）、神仏分離令でも破壊を免れた。身仏混交期の貴重な遺物である。なにもせずそのまま杉の巨木にとけているような感じである。数百年の風雪に耐えた枯れたたたずまいを見せていた。

ところで庄内地方といえば即身仏信仰があげられる。庄内六体の即身仏はすべて湯殿山系である。これについては面白い話を聞くことが出来た。寛永七年（一六三〇）、羽黒山別当となった本山派天宥上人が湯殿山・月山を羽黒山の支配下に置こうとしたことにはじまる紛議である。当時は家康の宗教政策により天下の修験は本山派（天台密教）か当山派（真言密教）何れかに属すことになった。（それまでは修験を両分していた当山派と本山派、いずれにも属さず、独自の修験実践を目指すもので特に羽黒派と呼ばれていた。山岳修行の実践により超験力の体得を目指していた。）勿論、真言宗湯殿山側は猛反対。結局この争論の中、即身仏第一号の淳海上人が入定した。特に寛文年間の訴訟後、湯殿山側の入定即身仏が続いた。それに比べ、羽黒山側では一体の即身仏も作られていない。天台密教には入定説話は存在しない。すなわち即身仏信仰はありえないのである。ここにも湯殿山側の攻勢が読み取れる。このように寛文期を中心とした江戸期の羽黒山との訴訟合戦時に即身仏が激増したことからも湯殿山と羽黒山との当時の抜き差しならない関係が読み取れた。

三、出羽国府跡・城輪の柵

翌朝、酒田入り口にある城輪の柵へ向かう。北には鳥海山の美しい山容が望まれた。標高一一～一二m、総面積五二万平方kmの広範囲にわたる遺跡である。ここでは実際に長期にわたり発掘調査の中心として活躍された酒田市立資料館館長の小野忍氏から説明を受けた（写真⑱）。三五次におよぶ発掘調査により当初の文献にも見られた軍事的施設・出羽柵ではないことが判明したという。築地によって囲まれ、各辺の中央には門が構えられていた（写真⑲⑳）。二四〇m一辺の方形内が政庁域で二八棟の建物が認められる。これら建物の規模・配置の遺構は国衙政庁のあり方（伯耆国庁や近江国庁遺構）に酷似しているという。しかも奈良期にさかのぼる遺物の出土もない。このことからも城柵とは認められないという。以上のことより今では平安時代の出羽国府跡というのが定説となっている。東西脇殿を配置した「コ」の字の配置も復元脇殿をみることより実感できた（写真㉑）。小野氏は平安初期、延暦か弘仁期に秋田城から後退して庄内につくられた出羽国衙跡と説明された。『三代実録』によれば仁和三年（八八七）当時、出羽国府が出羽郡井口に所在し

た。いわゆる「井口国府」だがここがその地ではないかという。しかし、ここも九世紀後半から一〇世紀にかけて一時的に「近側高敞の地」の八森遺跡に移転した模様だ。記録によると当時水害の被害が頻発している（同時期に国府移転は肥後、肥前、備前、丹後、相模などでもみられるという）。この時期は世界的にはダンケルクⅢという小海進期で水害の影響は無視できなかったものと思われる。外郭線内にも一二一m単位の地割で関連施設が建造され、漆紙文書、木簡、墨書土器等貴重な遺物も発見されている。築地塀の一部や政庁南門も復元されていた。この国府も律令政治の衰退とともにその機能が薄れてきたようだ。やがて忘れ去って行ったのかもしれない。

酒田湊の繁栄（日和山公園、山居倉庫）

市立酒田資料館では酒田民俗会会長の佐藤昇一氏から城輪柵と酒田舟運について説明を受けた。氏は京都の出身で酒田を客観的に論じられるところに興味を抱いた。言わば本音の議論とも言うべきか。常設展示では城輪柵発掘調査時の外郭線基礎角材や外郭東門柱根等が展示されていた。先ほどの城輪柵遺跡から発掘されたものである。北前船の模型も展示してあり、意外にも千石船の造りがよくわかった。酒田港の繁栄の様子についても北の蝦夷地から南の琉球を結ぶ広範囲な日本海文化の形成過程の図から理解できる。佐藤氏とバスで酒田市内を回る。資料館から本間家旧宅を通り、酒田港が一望できる日和山公園へ。途中、即身仏が二体安置されている真言宗海向寺前を通る。ここで木食修行後、土中入定の方法を知る。例の湯殿山系の即身仏である。

日和山公園は文化一〇年（一八一三）、港近くの丘に常夜灯を設置したことに始まる。ここは酒田港の景観とともに港の繁栄を物語る多くの文化遺産が点在する（写真㉒）。河村瑞賢御米置場、公園頂上部の常夜灯、これは文化一〇年（一八一三）年、酒田湊に出入りした廻船問屋が航海安全を祈願して建てたもので、台座の周囲に航路寄港地の廻船問屋の氏名が刻んである。突端には御影石で出来た方角石がある。御影石製で寛政六年の文献にも記述があり、現存するものとしては日本最古といわれる。松林銘（宝暦八年、本間光丘がここを基点に一帯を防風林のための植林をなした石碑）より下ると日本海を望む河村瑞賢の像が建っていた。時間が押しており、この像についての説明を充分聞くことが出来なかったことが残念である。この地からの眺めは当時を偲ばせるものではなかったが、往時の酒田湊についての説明から当時を想像することはできた。白帆をはらませた千石船が毎日数多く入港して賑わいをみせていたという。

酒田湊は出羽国が建設された八世紀にさかのぼるといわれる。平安時代の記録には都より出羽国までの海路を五二日と定めた当時の記録もあり、東北の平泉文化の表玄関だったことがわかる。鎌倉期には最上川舟運により内陸から運ばれる米の集積地、さらには日本海沿岸と京・大坂を結ぶ海上交通の拠点ともなっていた。当然、荷物の仲介や運送を営む豪商も現れ、江戸期には湊に入港する船を相手にする廻船問屋へと姿を変えて大きな勢力を持つようになる。寛文一二年（一六七二）、幕府の命を受けた河村瑞賢による西廻航路の整備により急速に発展することになる。河村は酒田から赤間（下関）を回って瀬戸内に入り、大坂から紀伊半島を回って江戸に向かう航路を整備したのである。それまでの経路に比べて短期間に確実に安全に大量に輸送できる。出羽国域米の集積地、積出港に加え

「天下の台所」大坂に直結した意味も大きい。天和三年（一六八三）には約三千艘が入港したという。積荷は播磨の塩、大坂・堺・伊勢からの木綿類、東北諸藩の木材類等がみられ、壮大な湊町文化を形作ったといえる。当時を偲ばせるのが豪商「鐙屋」であり、西鶴の日本永代蔵にもその記述がある。この地には後に金融業を営み、日本一の大地主となる本間家もあった。明治になり海運の主役が汽船へ移り、鉄道など内陸交通の発達により江戸期の繁栄も陰りが見えてきた。現在では当時の賑わいは見られないものの、日本海対岸諸国を結ぶ国際貿易港として山形や東北の経済発展に大きな役割を果たしている。

山居倉庫

次は日和山公園から眺望した港の山居倉庫へ。ここは最上川河口中州に明治二六年（一八九三）酒田米穀取引所の付属倉庫として建てられ、築百年以上経った今も現役の農業倉庫として活躍している（写真㉓、㉔）。土蔵つくりで壁面はコールタールを塗った板塀造りである。巨大な十二棟の屋根は二重構造で内部は湿気防止構造となっている。また蔵の背後にはケヤキの大木が倉庫を囲むように伸びており、日よけと風よけの役目を果たしている。自然を利用した低温管理で未だにＪＡ全農庄内の農業倉庫として活躍しているのには驚いた。幹線道路側の二棟は観光振興の拠点として「華の館」としてオープンしている。ここでは辻村ジュサブローの人形コーナーが設けられていたがその因果関係はよくわからない。また隣には銘菓・漬物・海産物土産物屋「幸の館」があり観光客の目玉となっているようだ。そういえば当日台湾からの観光客も多く訪れており、ガイドの口から盛んに「おしん！」の言が発せられていた。それ以外の言葉は残念ながら聞き取れなかったが。ここは「おしん」の舞台であったのである。黒壁となだらかな切妻屋根、日陰を作るケヤキ並木はフェーン現象の暑さを一時忘れさせてくれた。一二棟の西端には「庄内米歴史資料館」。ここは稲作・品種改良の歴史、生産・保管・流通の過程を紹介しているという。このように山居倉庫は酒田の観光振興拠点として情報を発信しているようだ。酒田湊全盛時、花街では沖縄言葉が流行し、幕末では大阪弁が花街の流行語であったという説明からも広域流通圏の酒田の姿が理解できた。

昼食後本間家旧本邸へ。玄関には樹齢四〇〇年のアカマツの巨木。台所には中二階部分があり、そこは女中、下男の寝起き部屋があった。奉公人の部屋が母屋にあるのである。こういう例はあまりないのではないか。ここは三代本間光丘が幕府巡検使一行の本陣として明和五年（一七六八）新築したものという。母屋桁行三四ｍ、梁間一六．五ｍの桟瓦葺平屋書院造り、部屋数二三、正面からは二〇〇〇石旗本格の長屋門構えの武家屋敷、その奥が商家造りとなっている。二つの建築様式が一体となっているのは全国的にまれであるという。内部の襖絵に驚いた。日本海海戦の図が油絵で描かれている。事務局の女性に二〇分で解説をお願いすると戸惑いながらもよく通る声でしっかりと解説をしていただいた。こんな短い時間で全て説明したことはなかったという。終了時には大きな拍手がおこった。

四、致道館と鶴岡

次は最終目的地、城下町鶴岡である。じりじりと真夏の太陽が照りつけ外気温三七度を越すフェーン現象の熱射の中であった。今まで経験した県外踏査でも間違いなくもっとも暑い一日かもしれない。

致道館は東北地方に現存する唯一の藩校で、備前・閑谷学校の絵図を借り、享和三年（一八〇三）着工、文化二年（一八〇五）、論語から取った「致道館」の額を掲げたという（写真㉕）。徂徠学を取り入れ、質実剛健を旨に自学自習、個性の伸長をはかり、厳重な試験を実施してきたという。現在は表御門、聖廟、講堂、御入間などが残されており、東北では唯一現存する藩校建築である。県文化財の版木・致道館本が一枚の欠損もなく残されていた。また、目を引くのは教科書や資料でおなじみの渡辺崋山筆の寺子屋を描いた『一掃百態』図の展示である。また少々気になったのが西郷隆盛関係の資料である。結構多い。御入の間で市教育委員会の笠井氏から幕末・維新の説明を受け、疑問が解けた。（写真㉖）

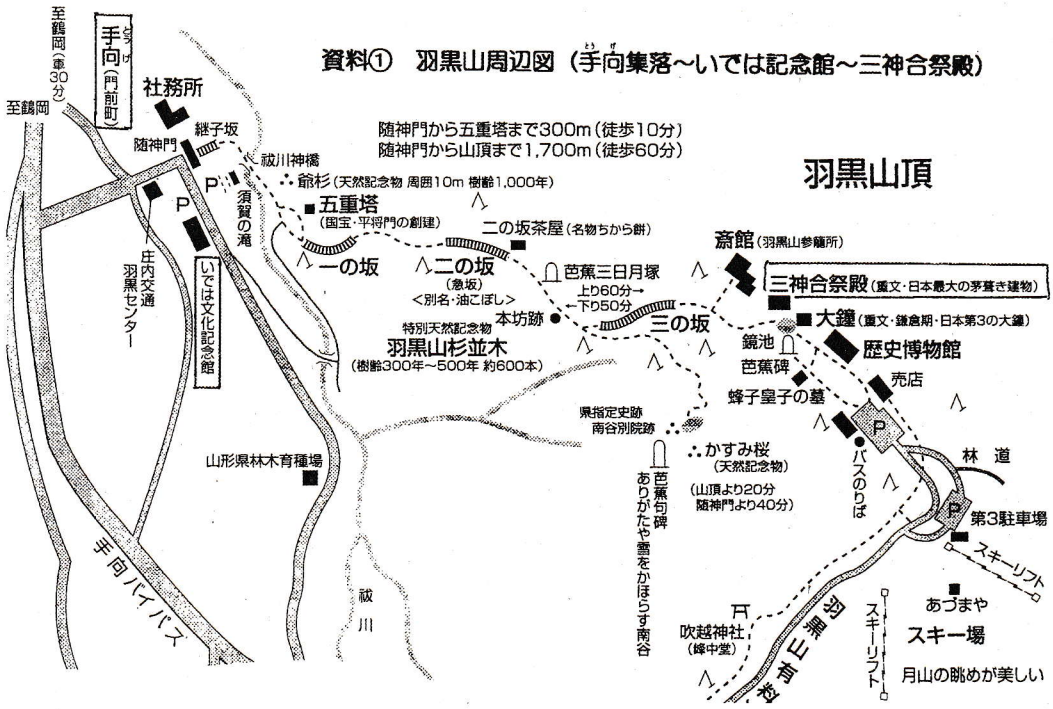
官軍に対して庄内藩は奥羽諸藩中でももっとも頑強に抵抗した藩であることは周知の通りである。明治元年（一八六八）、九月二六日、この部屋で新政府軍参謀黒田清隆に藩主・酒井忠篤は降伏した。このとき西郷も鶴岡入りしている。その後の処置は会津藩等と比べて際立った違いを見せている。藩が存続したばかりか優遇とさえ思える処遇もあったという。西郷隆盛の配慮で鶴岡は会津と同じ運命をたどることはなかった。今も庄内には西郷を尊敬する人々が多いという。致道館に西郷の書が展示してある理由もわかった。また、酒田には南洲神社が祭られ、鹿児島市と鶴岡市は今も兄弟都市として友好を深めている。このように西郷への恩が今でもこの地にある。帰り際、笠井氏になぜこのような処置を西郷がなしたかを質問した。以下は氏の推測である。

①庄内藩邸への薩摩藩による焼き討ちから戊辰戦争は始まった。これに西郷の負い目があったのではないか。

②大きな歴史の流れの中で庄内藩（への対応）で戊辰戦争を終結させる必要性に迫られた。最後をどう締めくくるかは新政府にとり大きな課題であった。皆から批難されるやり方ではなく何とか丸く治める必要があったのではないか。特に西郷にその思いが強かったのではないか。

③新政府軍は資金が底をついていた。これ以上攻撃を続ける余裕が無くなっていった。一方、庄内藩は資金的に若干余裕があった。だから解決を急ぐ必要があった。

笠井氏には外のフェーンの熱気に勝る熱弁で、汗を噴出しながらもわかりやすく懸命に説明していただいた。ここ鶴岡は周辺の致道博物館（写真㉗）、大宝館等、強く歴史と文化の薫る印象に残る城下町であった。いつにも増して暑い県外踏査であったが、蝉しぐれの中、無事に帰路につくことができたことは幸いである。



年代＼国名	加茂船	越後船	佐渡船	越中船	七尾船	能登船	加賀船	越前船	三国船	若狭船	丹後船	但馬船	因幡船	出雲船	隠岐船	石見船	周防船	備中船	播州船	坂越船	神戸船	兵庫船
天明７年							4															
寛政８年		37	1				27	3			15									9		
寛政13年		5					4				3											
文化13年		30	3	14		2	40	17				2						1	4	1	2	
文政４年		74		45	1		139	26												9	3	
文政９年		31	8	35			85	15			3									2	2	
慶応３年	2	21	1	40		17	105	66	2	2	47	37		3	9	72						
明治元年	5	44	6	21		14	55	39			27	29	4	11	8	88						1
明治２年	1	5		11		3	22	35			12	4	2	3	2	7	3					
合　計	8	247	19	166	1	36	481	201	2	2	107	72	6	17	19	167	3	1	4	21	7	1

（注）　この表は、毎月一回在番交替（御徒目付）時に記録されているものの集計である

年代＼	淡路船	讃岐船	筑後船	薩摩船	豊後船	大坂船	伊豆船	江戸船	塩越船	本庄船	亀田船	秋田船	津軽船	南部船	松前船	商船	御城米船	御雇船	蝦夷地御雇船	御手船	酒田船	地船	湊名なし	合計
天明７年															6								141	151
寛政８年						14									8	102	45						261	522
寛政13年						3		3							2	80	13		5				159	277
文化13年		1				10									9		15						22	173
文政４年			1			13							2	7	9		7	4						340
文政９年						14				6				5	5			4						215
慶応３年				1		9					4	3	5	2	21		1	5		3		8		486
明治元年	1				1	7	1		1			4	4		33	6				6	19	23		458
明治２年						1						3	4		7					3	9			137
合計	1	1	1	1	1	71	1	3	1	6	4	10	15	14	100	188	81	13	5	12	28	31	583	2,759

実際寄湊船数は恐らく年間400～600艘と思われる。

資料② 酒田湊・地方別入湊船数

○2006年夏季県外史跡踏査記録（2006年８月18日～19日）

㊟… 一部３月下旬時の写真も参考資料として掲載

①松岬公園の上杉鷹山像
(06. 3.28)

②松岬公園の上杉鷹山像
(06. 8.18)

③上杉神社への道

④頼朝寄進の黄金堂

⑤宿坊軒先の「引き綱」

⑥宿坊軒先の「引き綱」(06. 3.28)

⑦いでは文化記念館

⑧雪に埋まる三神合祭殿
(06. 3.28)

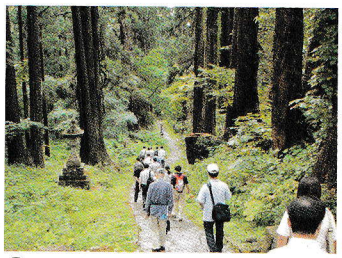
⑨三神合祭殿。左端は大鐘楼

⑩三神合祭殿

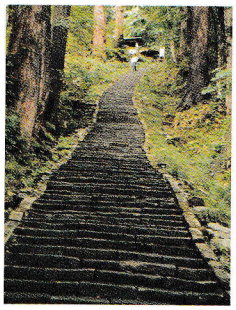
⑪三神合祭殿前の鏡池

⑫霊祭殿裏・水子供養の膨大な
卒塔婆と風車

⑬霊祭殿裏の首のない石仏群

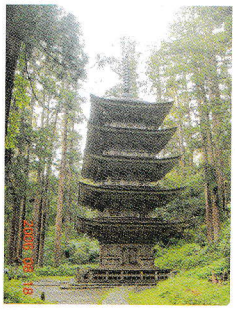


⑭羽黒山二の坂を下る

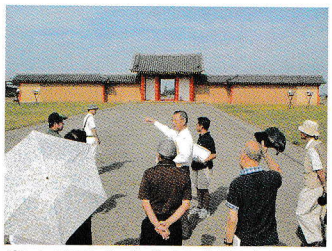


⑮踏み幅がせまい石段

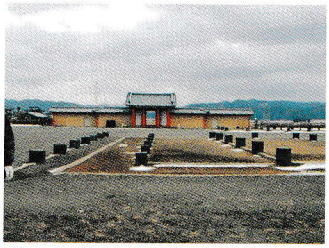
⑯斎館（羽黒山参籠所）



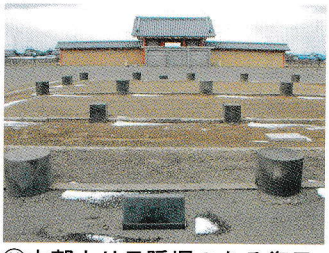
⑰五重塔



⑱大路跡から復元南門を望む。その先が内郭



⑲内郭より南門側を望む（06.3.28）



⑳内郭より目隠塀のある復元東門を望む（3.28）

㉑内郭内復元模型

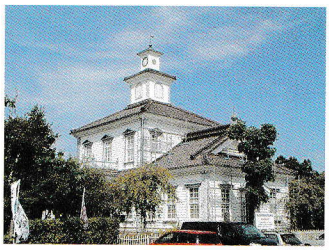
㉒日和山公園より酒田港を望む。当時の方角石も。

㉓山居倉庫前にて佐藤氏の説明を受ける。

㉔山居倉庫前の小鵜飼船。最上川上流から物資を運ぶ

㉕致道館前景

㉖致道館内御入の間にて笠井氏の説明。庄内藩降伏の間



㉗致道博物館。このときフェーンにより37.5℃記録